素描の魅力　十選

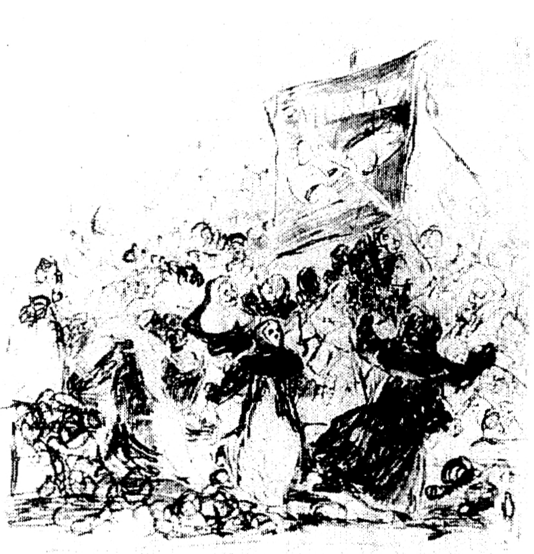
欧米の美術館から ⑥

洋画家　小島　俊男

マドリードのプラド美術館には、スペインの画家の手になるデッサンが多数収蔵されている。この小さなデッサンは、一九六八年に旅行した時に出合った。

この時たまたま祭りの行列と山車（だし）を見る機会があり、スペイン人の情熱的な国民性を強く感じた。画題の「鰯（いわし）の埋葬」は、一九三五年ごろまで続いたという宗教行事だが、私が見た祭りのように熱狂的なものだったに違いない。この作品はその熱狂的な人々の動作や表情、現場の雰囲気までクロッキーのように即興的に表現している。

完成作品はこれから十年後に描かれた。それには、晩年の「暗い絵」に通じるような不気味さが出ているが、デッサンは、市井の出来事をジャーナリストのように冷静な目で描いているのである。「ロス・カプリーチョス」や「戦争の惨禍」などを生み出したゴヤの確かな描写力が見事に生かされている。（十九世紀、紙にインク、二二×一八㌢、マドリード、プラド美術館蔵）



ゴヤ　鰯の埋葬

文化

超技巧曲、弾き手は電算機

◇ゴドフスキー編曲集を3年でCD自費制作◇

七澤　順一

○○○

絶版の楽譜、近所で発見

「聞いたことないですねぇ、それは。台帳にも——はい、やっぱりないです」

東京・荻窪の駅前にある楽器店で、私はだめでもともとという気持ちで十九世紀、リトアニアのピアニスト、レオポルト・ゴドフスキー編曲のショパン練習曲集の楽譜を探していた。

一部のマニアにしか知られていないゴドフスキー。彼の曲は手の込んだ装飾や技巧を施した編曲で、技術面であまりに難しすぎた。彼以外には演奏不可能であったせいか、広く支持されなかったらしい。

「茶色で五冊あるんですけど」

「茶色ねぇ、これぐらいですよ、今うちにあるのは」

びっしり並んだ楽譜棚の中から取り出したそれは、驚くべきことに私が探していたゴドフスキーの楽譜だったのである。

音大の資料室にもなく、大手の楽器店に海外発注を頼んでも無駄だった。絶版になっていて、ヨーロッパでも手に入れるのは難しいといわれていたものが、どういうわけか近所の楽器店で眠っていたのである。それも五冊そろって。

プレミアムがつくほどのものではないが、時々銀座の楽器店に立ち寄って尋ねるたびに、「入らないんですよ。この前も同じものを探してらっしゃる方がいらしたんですが」（それは私のことだろう）と聞かされていた私にとっては、貴重なものを発見したという喜びをおさえることができない。

私の職業はピアノの調律師。音楽史にも興味があり、独学で勉強していた。その過程でゴドフスキーの名は自然と頭に入ってきた。ルービンシュタインやホロヴィッツなど、有名な音楽家の伝記には、必ずといっていいほど権威のある音楽家としてゴドフスキーの名が登場している。それから名前を覚え、興味を持つようになったのである。

○○○

なんとか再現したい

私自身、趣味でピアノを弾く。譜面を眺めていると、頭の中で旋律が流れてくる。しかし、楽譜を手に入れたとはいえ、一流のピアニストでも簡単には弾けないゴドフスキーの曲を、私が弾けるはずはない。フランスのピアニスト、ダグラスマッチが去年の夏にCDを出し、他にも何人か弾いてはいるのだが、どれも指定のテンポではない。

そこで私は、コンピューターを使い、自動演奏ピアノに音を出させることで譜面通りの演奏を実現することを試みた。なんとかしてゴドフスキーが弾いた通りにこの曲を聴いてみたい、というのが素直な動機だった。以前からやってきたシンセサイザーなどの知識が、自動演奏による表現という考えを刺激したのであろう。さっそく、律儀に働くコンピューターに、一音一音指示するという作業から始めた。

朝の四時に起きて七時までコンピューターの前で没頭する。やることは数値を打ち込むだけ。コンピューターなら何でも簡単に出来て当然だが、指示したこと以外はやってくれないのもまたコンピューターである。

譜面通りに打ち込んだだけの状態では、音楽とはほど遠いもので、カチカチとただ音が出ているだけ。それぞれの音の強弱、長さ、タイミング、テンポ等、音楽的表情をつけるための細かい作業を必要とした。

例えば、同時に鍵盤を押さえる和音の場合、どんなに基礎練習を重ねたピアニストでも十本の指が出す音の強弱や長さは微妙に違ってしまうものである。それを単純にコンピューターで打ち込んだだけでは何とも味気ない。わざと崩す作業も必要になってくるというわけだ。

○○○

ピアノの指揮者に

クラシックピアノ曲の場合、その演奏の表情はテンポの大胆かつ微妙な変化が、かなりの部分を形作っている。ということは自分の思い通りに音の時間を管理すれば、骨組みは作れると考えた。言ってみれば私はピアノの指揮者になったのである。

ある程度作業が進むと、スタジオを借りて、自分がフロッピーディスクに入れたものがどのような音楽になっているかを、自動演奏ピアノにつなげて録音した。家に帰って少しでも気にかかるところがあれば、何度も数値を入れ直す。そうして少しずつ仕上げていった。

長くて四分、短ければ一分程度の練習曲を二十七曲。実際の約半分ではあるが、音符をひろうのに八カ月、編集作業に二年の時を要した。

興味のある人には是非聴いてもらいたいと、自費でCDを出すほど入れ込んでしまった。どこかお金を出してくれるところがないかと思ったのは事実だが、レコード会社の友人に「面白いけど売れないだろうな」と言われたこともあり、自分でやろうと決意したのだ。

録音はプロに頼んだが、この時はさすがにプロとアマチュアの違いを感じた。人間の口と違ってグランドピアノは発音体が大きいため、マイクの位置によって音が全然異なる。それまで自分が録音した音とは雲泥の差で、音を決めるまでに四時間も費やしたのには驚いた。

○○○

演奏者はナナサコフ

どうせ自費出版するのだからだれにも気兼ねせず面白くしてやろうと思い、架空のピアニストを作り出した。演奏者は七澤の名をもじってミヒャエル・ナナサコフとし、架空の経歴をつくってライナーノートに紹介文をいれた。パンフレットにのせたゴドフスキーの肖像画は、ゴドフスキーの資料請求をした時にワシントンの音楽図書館が送ってくれた写真のコピーをもとに、知人に描いてもらった。

さらにはこのCDだけにとどまらず、今後もコンピューターによる音楽演奏を続けていこうと音楽事務所も設立した。もっとも、自分自身やりたいことが多すぎるので、他からの依頼は時間的に不可能であるが。

CDの存在を知らせるために、音楽雑誌に自分で書いた広告を持ち込んだ。注文を受けたのは、やはり曲集の存在を知っていたマニアが多い。ミヒャエル・ナナサコフというピアニストが実在すると思って「すごいピアニストがいるものだ」と、驚きと感動の手紙が送られてくる。中には楽譜を持っている者もいて、「絶対に弾けるはずはない。コンピューターを使ったんじゃないですか」と半信半疑で問い合わせてくる人もいた。思いがけない反響は、うれしいものだ。

調律師としてピアノという楽器のメカニズムを知り尽くしている私は、その限界も心得ている。コンピューターによって広がったピアノの世界に最高の楽しみと感動を覚えている。（ななさわ・じゅんいち＝ピアノ調律師）

文化往来

香港で受ける映画「木村家の人々」

東京郊外に住むサラリーマン一家のお金への異常な執着ぶりを喜劇的に描いた日本映画「木村家の人々」（滝田洋二郎監督）が、香港で公開され大いに人気を呼んでいる。

百七十席の小劇場「影芸戯院」で昨年のクリスマスに封切られた「木村家の人々」は、二十九週目に入った現在も続映中。通常二、三週間で出し物が変わる香港の映画興行界にあっては異例のロングランとなっている。公開二十週を超えても客足は衰えず、週末の夜は満員札止めとなる盛況だ。

香港での英題は「YEN FAMILY」。映画館の性格も反映してか、客の年齢層は高めで、大学生やサラリーマンが中心。木村家の人々が続々と繰り出す珍妙な金もうけのアイデアにいちいち的確に反応し、冒頭から幕切れまでほとんど笑いが絶えない。

現地の日刊紙「明報」は「香港人が金もうけに余念がないのはすでに有名だが、日本人には恐れ入るばかりだ」と嘆きを込めながら「絶妙なる金の亡者の喜劇」と作品を高く評価している。

ただ、評の行間には辛口の日本観も顔を出す。映画の最後で金の亡者である父親と金もうけに嫌気がさした息子とが和解する場面を引き合いにだし、「金もうけと人情は共存できると言っているが、実際にはそうは言い難い。例えば、日本人は他国よりたくさんの金を得ているが、それに見合った人情を与えているだろうか」とチクリと刺すのを忘れない。

一方、金もうけに熱中する日本人の姿を、九七年の中国への返還を目前にしてせつな的に生きる香港人の姿とだぶらせて見る向きもある。「誰かがあなたを愛している」の監督、張婉婷は「とにかく手っとり早くお金を稼ごうというのがこのごろの香港の風潮。YEN FAMILYはそんな今の香港にぴったりの映画だと思う」と話していた。

私の履歴書

新井　正明

あらい　まさあき

④

軍靴の響き

学内なお自由な空気

一高気質、大臣とも議論

昭和六年九月十八日、満州事変が起きた。当時、中学校以上には配属将校が派遣され、一高には中佐と大尉の二人がきていた。軍事教練は大尉がもっぱら担当し、のちに中将になった島本正一中佐は世界情勢の講義をしていた。なかなかおもしろく、「軍事講談」と呼んでいた。

中国大陸の政治情勢に精通していた中佐は、「今は蔣介石が支配しているが、中国はいずれ赤化する」と繰り返し説明した。この地点に毛沢東、ここに朱徳がいて盛んに勢力を養っている、というような話をしていた。ところが、夏休みが終わって登校すると中佐の姿が消えている。何かが起こったに違いないと皆で話し合った。

九月十九日の号外を見てそのわけが判明した。奉天（現瀋陽）の北方にある柳条湖の鉄道爆破事件を契機に、関東軍は満州鉄道沿線を制圧、彼の率いる独立守備歩兵第二大隊が行動を起こしたのである。

緊張感は一気に高まり、軍国主義の足音が高まってきた。思想の取り締まりが厳しくなり、一高のなかでも左右の対立が日ごとに激しさを増していった。校内に入れない警察が校門に学生を呼び出しては検挙する、ということもたびたびあった。

当時、他の高校ではストが頻々と起こっていたが、一高ではそこまではいかなかった。逆に右翼的な学生が、左翼に対抗する組織をつくる動きも目立つようになった。敏感な友人ほど左になびいたように思う。私は左右どちらにも肩入れすることなく、その意味では平凡な学生の一人に過ぎなかった。

しかし、学校内部にはまだ自由な空気があふれていた。寮には全寮晩餐会とか全寮茶話会といった会合があった。そんな席上、島本中佐が軍人の立場から自説を主張すると、何人もの教授から「軍人は何も分かっていない」と逆襲されることもしばしばだった。気骨のある教師が多かったのである。

文相だった鳩山一郎氏が、一高の先輩として茶話会に訪れたことがある。全校の学生を前に「これからの学生は大いにスポーツをやらなければならない」と主張された。するとドイツ語の丸山通一先生がすかさず異議ありと手を挙げた。「文部大臣たるものがシュポルツ（ドイツ語でスポーツのこと）を奨励するとは何ごとか。勉強しろというのならともかくシュポルツは遊びではないか」。これに対して鳩山氏は「丸山先生は頭が古い」とまた反論する。世間では厳しい空気が流れ始めていたが、一高の中では一国の大臣とも議論できたのである。

ドイツ語の岩元禎先生は、夏目漱石の「三四郎」に出てくる哲学者の広田先生のモデルといわれる。試験の採点は非常に厳正で、「クラスの半分以上が落第させられた」と小説家の山本有三氏が書いている。

私は二年から三年にかけてゲーテの「わが生活より―詩と真実」という自叙伝的小説の講義を岩元先生と立沢剛先生から受けた。この小説の扉にギリシャ語で「懲らされてこそ教育である」との言葉がある。教育というのは懲らされるものであって、自由にさせるのは教育ではない、という意味だろう。岩元先生はその言葉通りに実践されたのだと思う。

また、漱石の親友の菅虎雄先生にもドイツ語を教わった。はかま姿で教科書を懐にいれてふらりと教室に現れ、いすの上に正座して講義する独特のスタイルがなつかしい。

「虞美人草」の冒頭に出てくる宗近君と甲野君の比叡山登山は菅先生と漱石の経験をもとに書かれている。そこでわれわれはわざと「漱石と比叡山に登ったときはどうだったんですか」と質問すると、「うん、そうだったなあ」と昔話を懐かしそうに繰り返す。当然、授業はあまり進まず、「あまり講義できなかったなあ」と教室を出ていかれたこともしばしばだった。

父洞騰は「法学士になれ」と言っていた。「法科を出れば何にでもなれる」という明治時代の考え方を持っていたためかもしれない。一高を卒業するに際して多くの友人と同様、迷わず東京帝国大学法学部を受験した。中学、高校の入試には失敗したが、大学にはすんなり合格した。

（住友生命保険名誉会長）

交遊抄

人生の導師

八木　勇平

私にとっての人生の導師は、東急グループの創設者、五島慶太さんである。昭和八年に東京横浜電鉄（現東京急行電鉄）に入社して間もなく、五島さんの近くで仕事をさせてもらい、多くのことを教えられた。

五島さんの事業にかける意気込みは激しく、また厳しいものがあったが、当時五十代の半ばだった五島さんは、三十も年のちがう私たちが持ち込む話を実によく聞いてくれた。だからできたのかとも思うが、五島さんに思い切った〝諫言（かんげん）〟をしたことがある。

終戦直後の労働攻勢はすさまじく、人民裁判的なつるし上げはやる、社長の家に土足で上がり込んで台所をかき回しはするという状態だった。根が剛毅な五島さんは自分で直接収拾に当たる意向を固めたことがみてとれた。

しかし、東条開戦内閣の運輸通信大臣として追放が取りざたされていた五島さんが騒ぎに介入すれば、事態はどこまでエスカレートするかわからない。人事課長をしていた私はある夜、ひとりで五島邸に出かけてこう言った。「腹は立つでしょうが、自分でこの騒ぎを取り鎮めてやるという考えは持たないでいただきたい。世界の歴史を見れば敗戦が革命につながったことがあります。せいぜい一年か二年半のことですから辛抱していただきたい」と。

五島さんは苦虫をかみつぶしたような顔をして黙て聞いていたが、翌からは、少なくともの席上ではぴたりとの問題に触れなくなた。その後間もなく、五島さんは公職追放遭った。昭和二十六夏にようやく自由にったとき、五島さん「梅雨晴れて見上ぐ空の広さかな」とい句をつくって解放の感慨を込た。私はそれを聞き、心の中何かがすーっと抜けていくよな気がした。

今年は五島さんの三十三忌。私もすでに五島さんの寿より二年長い人生を過ごしてる。偉人の生涯と比べて、いずらに馬齢を重ねたという気してならない。（やぎ・ゆうい＝東急建設会長）